

●第三節 三心について

『選擇本願念佛集』（以下『選擇集』）の第八章段（以下、三心章と言う）について見てもわかるように、法然は三心については善導と同等以上に重要視していた。これは法語類にも三心に触れたものが多く残っていることからわかる。多くの場合は善導の『觀經疏』、『往生礼讃』を日本語訳し、平易に解釈したものであるが、またそれは善導の意図をいかに正確に伝えたかったかという意志の表れと見ることもできる。しかし、明らかに善導の所説を進めて解釈していることも多い。

法然は三心をひと言で「行者至要、往生目足也」（『觀無量寿經釈』、『法全』一二六頁）と述べ表している。

次に法然独自の三心論について検討してみたい。

●第三節 選擇本願念仏と三心

法然はその主著である『選擇集』において選擇本願念仏を確立した。その『選擇集』の構成から法然の三心論の一端を論じてみたい。

『選擇集』の三心章には『觀經疏』、『往生礼讃』の三心部分のほとんどが引用され、その